

ラテン語入門

吳 茂 一 著



岩波全書

ラテン語入門

吳 茂 一 著



呉 茂一

1897年東京に生る。

1925年東京大学文学部卒業。西洋古典文学、語学を専攻。1926-9年まで欧州(主としてオックスフォード、ヴィーン)に留学。東京大学、名古屋大学教授。在ローマ日本文化会館長等を歴任、現在主として著述に従事。

訳書:「イーリアス」「黄金のろば」
「アリストパネス鳥」「ギリシア抒情詩選」
「アガ멤ノン」「アンティゴネー」
「ダフニスとクロエー」等。

著書:「ギリシア神話」「西洋文化の源をたずねて」
「ギリシアの詩人たち」
「ギリシア悲劇・物語とその世界」等。

ラテン語入門

岩波全書 172

1952年10月25日 第1刷発行

1972年3月20日 第18刷発行

¥ 500

著 者 呉 茂 一

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

落丁・乱丁本はお取替いたします 精興社印刷・三水舎製本

は し が き

すでに岩波全書には、田中・松平兩氏著「ギリシア語入門」があるので、本書はその體裁、要綱とも大體これに倣って、ラテン語文法の概要を讀者に提示し、直接にローマ古典を読むための準備階梯たらんことを期した。本來からいうと秩序をととのえた文法のほうがはるかに通鑑にも参照にも便であるが、入門としてはやはり階次的に練習をつみながら進むのが適當と考えられるので、この方法をとることにした次第である。練習問題として、和文羅譯はおのずから制限があり、なるべく容易なものを擇び、主としてその項目の知識を復習記憶させるのを主眼としたが、羅文和譯のほうは、努めて古典に準じ、ことにキケロー、カエサル、その他古典期の作家からの引用を支援とした。句が多く接續法がすぐに飛び出すラテン文章の特質から、いきおい長い文章はかなり進んでからでない、古典作家からは求め得ないので、初歩のうちは多少とも無味乾燥の弊を免れがたいとも思惟されるが、若干のカトゥルス、ホラティウスなど詩人からの引用はその間の息抜きともなうか。もとより入門書として文法の委細をつくすことは期していないので、さらに一步を進めんとされる學者には、下に記す歐米のラテン文法書を閱讀されようことを勧める。

なお例文、問題については巻尾に添えた羅和、和羅の兩語彙をたえず参照されたく、また文法に關する事項のためには要項一覽を附して参考とした。その他動詞變化はギリシア語は固よりながら、ラテン語でも相當に厄介なので、動詞變化基本形表をも参照され、完了幹、過去分詞幹の出來かた、ありかたを把握されるよう（不明の場合は基本形表について檢べられたい）お勧めする。

その他種々不足なところ、可能な過誤、誤植などについては、幸に著者または發行所まで御教示に預りたい。なお出刊にあたり種々

助力を與えられ、支援を吝まれなかった岩波書店の方々、わけでも
波木居齊二氏、城塚榮子氏、および面倒な語彙の作成に協力された
仲澤規雄氏らに、著者の深甚な謝意をささげる。

昭和二十七年五月

湘南寓居において

吳 茂 一

今回の増刷に際して

初刊後早くも十數年を経て活字の鎖磨も時に見られ、かつまた
母音長音符の調整も考慮すべく若干の訂正や更改を可とする點な
ど、版を改めるに當たってその機を與えられたことを岩波書店の
方々に謝しなければならない。また全體に亘り委細の検討を加え
られた北海道大の田中利光君、東大の井上忠君その他の方々にも
併せて著者の謝意をこの機會に表すことをゆるされたい。

昭和四十三年 秋

著者併記

参 考 文 献

(A. は高級. M. は中等程度. P. は初歩.)

ラテン文法書

1. Sloman, A.: A Grammar of Classical Latin. Cambridge (M.)
2. Gildersleeve-Lodge: A Latin Grammar. Macmillan, London (M.)
3. Harkness, A.: A Complete Latin Grammar. New York. (M.)
4. Kieckers, E.: Historische lateinische Grammatik. Max Hueber, München (A.)
5. Kühner, R.: Ausführliche Grammatik d. latein. Sprache in 3 Bden. Hahn, Hannover. (A.)
6. Sommer, Ferdinand: Handbuch d. latein. Laut- u. Formenlehre. 3. Aufl. 1914, K. Winter, Heidelberg. (A.)
7. Leumann-Hofmann-Szantyr: Lateinische Grammatik. 1963-4. (Müller'sche Handbuch d. Altertums wissenschaft) Beck, München. (A.)
8. Skutsch, Fr.: Die lateinische Sprache (Die Kultur d. Gegenwart. I. VIII. 3.) 1912. Teubner. (M.—A.)
9. Stolz-Debrunner: Geschichte d. latein. Sprache³. (Samml. Göschen 492), 1953, W. Gruyter. Berlin. (A.)
10. Meillet, A.: Esquisse d'une histoire de la langue latine⁵. 1948. Paris. (M.—A.)
11. Niedermann, M.: Historische Lautlehre d. Lateinischen³. 1953, C. Winter, Heidelberg. (A.)
12. Ernout, A.: Morphologie historique du latin. 1945, Klincksieck, Paris. (A.)
13. Ernout-Thomas: Syntaxe latine. 1951, Klincksieck, Paris. (M.—A.)

14. Juret, A. C.: *Système de la syntaxe latine*². 1933.
Les Belles Lettres, Paris. (A.)

これらのうち 1. 2. 3. は孰れも High School 程度の教科書でそれぞれ特長もあるが、実用的には 2. が一番要領を得ようか。Kieckers は言語学者で比較言語学上の説明に富み、5. は例証に豊かに委細をつくすが、学問的には 7. がもっとも高い水準を示している。6. は純粹に言語学的に解説し、その方面では年代の些か古いのを除けば、最も信拠すべきものである。8, 10 はともに名著の評判が高いラテン語史で、共に近代ロマンス諸語に至るまでのラテン語の諸相を解明し、これを読めば必ず獲るところがあろう。ことに 8 は簡要、9 は当代比較言語学の第一人者たる D が最近に書改めたもの、小冊子ながら内容豊富に、碑文等の実証的資料をよく用いている。11—13 は相並んで現在フランス学界の水準の高さを示す最も新しい業績である。14 はやや旧著となったが資料をよく集め、今なお有益である。11 はフランス版もあり、12 はドイツ訳も出ている。

辞典としてはイギリスでは、Oxford 大学出版部の、Lewis and Short 著の *A Latin Dictionary* が、いちばん引例に富み、優れているが、初学者には訳語がやや見出しにく、難があるかも知れない。学生用には同出版部でこれを簡約した *Elementary Latin Dictionary* か、もう少し進んでは同著者の *A Latin Dict. for Schools* がよいであろう。拉英—英拉をかねた Cassel (Marchant and Charles) も個有名詞を多く含み便利な点もある。ドイツでは Georges の *Ausführliches latein-deutsches Handwörterbuch* (Hahn, 拉独—独拉とも 4 冊) がもっとも好評であるが、活字が大きいので量のわりに語数は少い。その他 Heinichen, Menge などの *Schulwörterbuch* (Teubner 版) があるが、それらよりは 1952 年に出了 Haas-Kienle の *Lat-deutsch. Wörterbuch* (Heidelberg, Kerle) が言語学的の説明もあり優れている。フランスでは今のところ F. Gaffiot の *Dictionnaire illustré Latin-Français* (1934 より) がよかろう、その学生用 *D. abrégé* もあるが(共に Hachette)、これは更に簡略でごく初学用である。

目 次

I	ラテン語とは何か	1
II	字母・発音・音韻の分類	3
III	音節・アクセント・句讀	8
IV	動詞の變化：規則動詞の直說法・現在・ 能動相	11
V	名詞の變化：第一變化名詞	16
	不規則動詞 Dō および Sum の變化	
VI	直說法・能動・未完了過去	21
	不定法について (1). Eō, Possum Volō の變化	
VII	第二變化名詞・-o- に終る語幹	25
VIII	規則動詞の未來・直說法・能動.	30
	語順および疑問文について	
IX	形容詞の變化：第一，第二變化	35
X	動詞の變化：直說法・完了・能動.	40
XI	代名詞の變化，および關係代名詞句.....	46
	關係代名詞，疑問代名詞，不定代名詞	
XII	過去完了および未來完了・直說法・能動. ..	51
	不定法およびその用法 (2)	
XIII	第三變化の名詞 (1). -i- 語幹	56

XIV	動詞の變化：接續法・能動相。單文に おける接續法の意味	62
XV	形容詞の變化：第三變化，-i- 語幹.....	67
	人稱代名詞，所有代名詞	
XVI	動詞の變化：直說法・受動相。現在， 未完了過去，未來	73
XVII	完了受動分詞および Supīnum につい て	79
XVIII	動詞の變化：直說法・受動・完了系の 三時稱および Deponent Verbs につい て	85
XIX	第三變化の名詞 (2). Mute 語幹，およ び分詞について	91
XX	動詞の變化；接續法・受動相。時稱の 對應および間接疑問文	97
XXI	第三變化の名詞 (3). Sibilant, nasal and liquid stems；第三變化子音幹形容詞	102
XXII	第四變化および第五變化所屬の名詞 前置詞について	108
XXIII	動詞の變化：命令法。副詞について	115
XXIV	指示代名詞，代名形容詞および數詞に ついて	121
XXV	“非人稱動詞”，Verba Impersonālia	

および Gerundia, Gerundīva について …	127
XXVI 形容詞と副詞の “ 比較 ” Comparatiō について……………	134
XXVII 接續詞および文の構造について 不定法句, 理由句……………	141
XXVIII 目的句, 傾向結果句およびその展開……	147
XXIX 時の句, Cum および Si の句. 條件文 の構成について……………	155
XXX 讓歩句, 比較句, および間接話法につ いて. 間接表明における條件文……………	163
附録 I 特異なる變化を示す名詞および動詞に ついて ……………	174
II ギリシア名詞の變化 (ラテン文中にお ける)……………	180
III 古風な名詞および動詞の語形について	183
IV 動詞現在幹の形成法について ……………	185
V ラテン語における母音交替 Ablaut に ついて ……………	188

變 化 表

I 名詞の變化 ……………	195
II 形容詞の變化 ……………	202
III 代名詞の變化 ……………	206

IV 數詞	210
V 動詞の變化	214
主要動詞基本形表	236
語彙 (羅一和)	248
(和一羅)	293
文法用語索引	303
問題解答	313

I. ラテン語とは何か

ラテン語 *Lingua Latīna* というのは、つまり古代のローマ市民の用語であって、その地がイタリアの中のラティウム *Latium* という區域に属していたことによる名稱である。よってローマ人はまた *Latīnī* と呼ばれることもあるが、厳密には *Latīnī* のほうが内容のひろい名稱である。

ラテン語も文學として廣く用いられるようになった紀元前三世紀頃から中世までその歴史が長く、その間には語形や發音や用法にも非常な變化があるのは當然であろう。一般に正しいラテン語と認定されているのは、その中でも古典時代と呼ばれる、紀元前一世紀から紀元後第二世紀頃の言語で、殊に大雄辯家で多くの著述もあるキケロー *Mārcus Tullius Cicerō* (106—43 B.C.) や大政治家のカエサル *Gāius Iūlius Caesar* (102—44 B.C.), ついで詩文ではウェルギリウス *Pūblius Vergilius Marō* (70—19 B.C.) やホラーティウス *Quīntus Horātius Flaccus* (65—8 B.C.) らの作品に用いられているものは標準的なラテン古典文語として重きをなしている。ラテン語は一方公用語として廣くローマ帝國の版圖内に流通し、その滅亡後は地方的分化を遂げて今日のフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、プロヴァンス語、ルーマニア語等となった。つまりフランス語以下とラテン語とは、現代日本語や琉球語と古事記や萬葉集の言葉との關係に相似た關係に立っているといっても差支えない。言語の推移に重大な交渉をもっているのはこれを使用する種族の受けた内的及び外的な變化である。ことにその文化に對する、社會的政治的な國外からの影響は著しい變化をこれに與える。いまラテン語についてこれを挙げれば、建國當初におけるエトルスキ *Etrusci* 人と、共和制(殊に後半)時代のギリシア文化との影響はともに注目さるべく、殊にギリシア語とその文物とは、ちょう

ど漢語や漢文化が上代の日本に與えたのに平行する影響力をローマの上に有していた。この點はいろんな場合に記憶さるべきものとして現れよう。

ラテン語は古くはギリシア語やインドのサンスクリット語、新しくは現代のロシア、ドイツ、イギリスその他歐洲の大部分の地方に行われる言語と等しく、いわゆる印歐語族 *Indo-european languages* に屬する。その近縁關係はことに音韻變化や重要な單語の語根の同一に顯著であるが、一般にラテン語は原形より見てギリシア語やサンスクリットよりは壞れた状態を示している。しかしまだまだ相當古い段階を示してはいるので、これら諸語の基本的な理解にラテン語が、またラテン語の理解にそれらが、役立つところは極めて大きい。

II. 字母. 發音. 音韻の分類

§ 1. 古典期末において常用された**字母** Elementa は次の 23 である。

大文字	小文字	名 稱	音 價
A	a	ā	a, a:
B	b	bē	b
C	c	kē	k
D	d	dē	d
E	e	ē	e, e:
F	f	ef	f
G	g	gē	g
H	h	hā	h
I	i	i	i, i: ; j
K	k	kā	k
L	l	el	l
M	m	em	m
N	n	en	n
O	o	ō	o, o:
P	p	pē	p
Q	q	kū	k(w)
R	r	er	r
S	s	es	s
T	t	tē	t
V(U)	v(u)	ū	u, u: ; w
X	x	ix	ks
Y	y	ȳ (ȳ psilon)	y, y:
Z	z	zēta	z

§ 2. ラテン文字，即ちローマ字はもとギリシア文字から出ていて，その中でも西ギリシア文字系に屬する．しかしその發展途上でエトルスキー人の影響を受けたものと考えられ，ギリシア文字の Γ (κ) を清音 C にし，のち濁音 G をその變形から造り出したのもその關係からと推察される．キケローの時代までは X までの 21 字だったが，紀元の初めにギリシア語からの借用語に宛てて，Y と Z とが加えられた（尤も Z は古くは使用されたことがある）．

いわゆる大文字が大體古く一般に使用された字形を傳えるもので小文字は草書體から後世に區別のため撰り出し，近代の印刷業者の習慣から生じたものである．V を子音に，U を母音に區別使用するのも，J を I の子音に用いるのも同じ習慣による．

§ 3. ラテン文字には K 音を表すのに，C と K と Q の三文字がある．このうち K は特に A の前に，C は E, I の前に，Q は O, U の前に使用されてそのエトルスキー起源を示していたが，古典期では K は Kalendae 朔日の外は常用されることがなくなった．また Q は専ら qu の結合にのみ用いられ，他の K 音は悉く C で表わされるのが常である．

なお I と V とは，母音にも子音にも同字形が用いられていた (§2 末項参照)．

發 音

§ 4. ラテン語の發音は大體 § 1 の右欄に示した音價による．その他の細かい點は次項 § 5 について知られたい．なおこの發音は専ら古典時代によったもので，その以後では母音，子音ともに相當の變異がうかがわれることを諒知されたい．その傾向は大體現代のイタリア語やフランス語が示すところと見てよからう．

母 音 組 織

§ 5. 母音 Vōcālēs を表す文字は a, e, i, o, u とギリシアからの

借用語に専ら用いられる y の六字で、この各々に**長音**と**短音**がある(本書では區別するため、本文中の長母音には $\bar{a}, \bar{e}$ の如く長音符を付けることにしたが、これは便宜上のことで、勿論通例は付されていない)。この音の長短は語形の變化にも意義の相違にも大切なことなので、十分注意して分別されたい。一般に a 以外の母音は、長音では狭く (close), 短音では廣い (open) 傾向にある。

大體にいて a は ‘ア, アー’, e は ‘エ, エー’, i は ‘イ, イー’ (日本語のイは甚しく狭い, 平たいから, それよりはずっと廣い, ことに短音で然り), u は ‘ウ, ウー’ (日本語のウは正しいウでなく, ウとイの合の子である, 従つてもっと唇を丸くすること), o は オ, オーとしてよからう。

§ 6. その他に若干の**重母音** Diphthongī がある。即ち本來の重母音には：

ae ⁽¹⁾ [ae]	例	アエデース	サエクルム
		aedēs,	saeclum
oe ⁽²⁾ [oe]		ポエナ	フォエドゥス
		poena,	foedus
au ⁽³⁾ [au]		ファウヌス	アウルム
		Faunus,	aurum

外來語または偶然の合音によるものには：

ei ⁽⁴⁾ [ei]		エイユス	レイ
		eius,	rei

註 (1) 古くは ai だったが、紀元前二世紀初めから i が廣くなり、前二世紀末の金石文ではもっぱら ae と記され、發音の變化を示す、これは進んでついに ε となるもので、俗語や田舎ではその頃すでに $ae > \bar{e}$ と發音されていたと推定される。

(2) 同じく古くは oi. しかし元來の oi は通例 $\bar{u}$, 時に $\bar{i}$ となり、oe として残つたのはむしろ特別な一部にすぎない(唇音後の六語)。例えば poena (ギリシア語 poinē より、俄、罰金): pūniō (罰する)。この語は後さらにフランス語で peine、英語で pain (苦痛) と變化していった。

(3) au は古くから残つた重母音だが、卑語や田舎語では $\bar{o}$ と發音されていたらしい。ラテン俗語や近代ロマンス語もその系統である。例。aurum > イタリア oro, フランス or (金)。

(4) 昔からあつた ei は古典期には $\bar{i}$ となつた(ギリシア語から入つたものも同様)。それで新しいのは本當の重母音ではない。この ei, eius は時に re- $\bar{i}$, ē- $\bar{i}$ us なども發音される。いわゆる diaeresis である (§ 352 参照)。

ui	[ui]	フイト fuit,	クイユス cuius
eu ⁽¹⁾	[eu]	エーヘウ ēheu,	エウルス eurus

がそれである。

子音組織

§ 7. ラテン字母ののこりのものは子音 Consonantes を表すが、いまこれを類別すると下のようになる。

單子音 { 黙音 mutae p, b, t, d, c, k, q, g.
 流音⁽²⁾ liquidae l, r, m, n.
 擦音 fricativa et sibilantes f, s, z (i, u).⁽³⁾

二重子音: x

半母音: i, u, l, r, m, n⁽⁴⁾

§ 8. このうち黙音はさらに次の如くに分類される。

	唇音 labiales	齒音 dentales	口蓋音 palatales
無聲音 tenues	p	t	c, k, q
有聲音 mediae	b	d	g

口蓋音中 k は殆んど使用されず, q は qu- の結合 (もと labio-velar sound) にのみ用いられ, 他は悉く通例 c で間に合わされる

註 (1) 昔からの eu, ou はみな ū になったので, 新しいのはギリシア語から入った語か偶然の結合である. e.g. neuter < ne-uter

(2) m, n はまた區別して鼻音 nasales と呼ばれる. 共にその通有性は持續的な有音聲音なることで, この點において母音と同性質を有する. 従つて下記の如く半母音としても働くのである.

(3) h はごく弱く, またギリシア文法の影響からして純然たる子音ではなく, むしろ母音の發音の仕方「粗い發音」を表すものと考えられた. i, u はそれぞれ子音として作用する i, u (iam [jam], vōs [wōs] のごとく) であつて, 本來は有聲の擦音であるが, また半母音とも考えられる. つまり擦音はその發音の mode をいうので, 半母音はその機能面の稱呼である.

(4) 半母音とは, 母音たり得るものが子音として, つまり母音と結合して子音的に使用されるのをいうので, i, u (=j, w) と l, r, m, n とは音韻變化及び作用上で平行した現象を示している.